

## マイノリティをうみだす囲み

——台湾先住民族の保留地「蕃地」(番地)の変遷とその機能——

小林 岳二

### 一 「番地」と「蕃地」

小林です。よろしく願います。先ほど村松さんから紹介がありました。私は今年の三月まで学習院大学大学院に在学していま

した。専攻は台湾先住民族の歴史学的研究です。私の本日のテーマは、「マイノリティをうみだす囲み——台湾先住民族の保留地「蕃地」(番地)の変遷とその機能——」です。ここで草冠のある「蕃地」とは日本統治期の呼び方です。その次の草冠のない「番地」というのは、日本統治期の前である清代の呼び方です。但し、正確に言い直しますと、台湾先住民族の保留地と書いたのですが、いわゆる土地の所有権が保留されているということになると、厳密には、日本統治期には「高砂族所要地」という言い方をしています。台湾先住民族の特別行政区「蕃地」と言ったほうが良いかもしれません。

実は、先ほど谷本さんの発表を伺ったおり、アイヌの蝦夷地と清代における台湾の状況は非常によく似ているところがあるなと感じました。清代の台湾においては、未帰順の先住民族の住んでいる地

域をいわゆる草冠のない「番地」と言っており、一八七四年まで実効支配を放棄していました。日本の台湾出兵を引き金に、一八七五年から「開山撫番」政策を採り、「番地」の実効支配の確立が試みられました。

「開山撫番」とは、大陸から台湾への渡航制限と、「番地」への入禁を全面的に解除し、未帰順先住民を武力を用いても服従させた後、教化・授産等で実効支配を確立し、並行して「番地」への大陸からの移民・拓墾を奨励する政策です。清朝としては一八七四年まで統治を放棄していた「番地」ですが、実はその「番地」の未帰順先住民と漢族との関係は非常に密接なものがあ、先ほどの谷本さんの話を受けると、先住民族のほうが漢化することは勿論あるのですが、漢族の方も先住民族の影響を強く受けていました。

清代に台湾へ移住してきたのは、福建省南部からの漢族(閩南系)と客家系の漢族です。台湾全土には先住民族が居住していましたが、そこに漢族が入ってくるわけです。清朝は漢族・帰順した先住民族と、未帰順の先住民族の居住地「番地」の間に境界線を引き、

互いの往来を禁止します。その境界線については、拙稿「伊能嘉矩の台湾原住民族研究」で詳しく述べておきました。<sup>(1)</sup> 結果的には、閩南系漢族と客家系漢族、そして帰順した先住民族と未帰順先住民族の住み分けができた原因の一つが、清朝の引いた境界線でした。

日本統治期、台湾総督府はこの清朝の「蕃地」という枠組みを踏襲することになります。それが「蕃地」です。今日の話は、日本の台湾総督府は「蕃地」を実際どのように統治したのか、ということで、前近代と言うよりは近代になってからが考察の対象になります。清代の「蕃地」、そして日本統治期の「蕃地」は、戦後の中華民国政府においても、機能的に引き継がれた面があります。連続しているわけです。実は「蕃地」があったからこそ、今日の台湾先住民族の諸民族集団がいろいろな点で維持されたともいえるのです。

## 二 「蕃地」「蕃地」によって分けられた「平埔族」と「原住民」

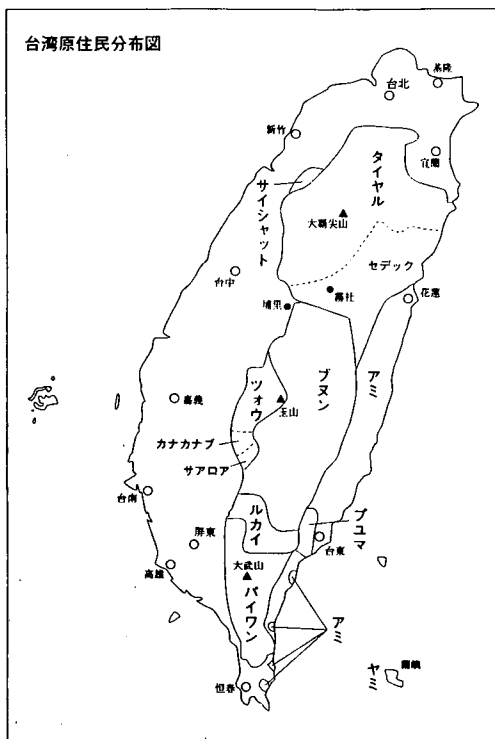
ここで、まず始めに概論として参考文献をあげておきます。「先住民のアイデンティティ」という概説をアジア経済研究所の『アジア研ワールド・トレンド』に短い文章ですが書かせていただきました。<sup>(2)</sup> 台湾では八〇年代以降、特に八七年に戒嚴令が解除されてから、自分たちの文化やアイデンティティなどを見直す動きが高まってきました。台湾の先住民族についても、八三年から「台湾原住民族運動」と呼ばれる先住民族としての権利獲得運動がはじまりました。

台湾人が現在、自らのアイデンティティを振り返る際に無視できないのが、一七世紀以降本格化した大陸からの漢族移民が先住民族と

融合した「平埔族」という平原部に住んでいる漢化した先住民族の存在です。「平埔族」は、一〇ほどの数ある民族集団の総称です。「平埔族」と漢族は混血し、文化的影響をお互い受けあいました。その「平埔族」の歴史を無視できません。レジュメの参考文献の清代の箇所で張士陽先生の論文をあげておきました。<sup>(3)</sup> 張論文では、清代の「平埔族」について、近年の台湾における歴史学的研究の状況がまとめられています。九〇年代、台湾において「平埔族」研究は、歴史学や人類学などで非常に盛んになりました。

先住民族としての権利獲得を求める「台湾原住民族運動」が成功した背景にも、「平埔族」に対する関心の高まりが関係しています。しかし、「平埔族」への関心は、「台湾原住民族運動」を成功に導いた大きな要因とはいえません。「台湾原住民族運動」をはじめた人々、また、その担い手も「平埔族」とは異なる人々です。

「台湾原住民族運動」をはじめた人々は戸籍上、正確には身分上「原住民」と呼ばれる人々です。「原住民」、そして民族としての権利を強調した「原住民族」という名称は、今日の中華民国憲法増修条文にも明記されています。現在台湾で約三二〇〇万人の人口に対し、「原住民」籍に属する人々は約四〇万人います。人口比率でいうと約一・八パーセントですね。但し、この「原住民」籍に「平埔族」は入っていません。「台湾原住民族運動」は、「原住民」籍の人々によって担われたのです。台湾「原住民」の「原」という字は、中国語の「原来」という意味です。つまり、台湾に「もともと」住んでいた主人であるという意識を強調したものです。「台湾原住民族運動」の成功は、「原住民」籍に属する運動家の努力によるとこ



(日本順益台湾原住民研究会編  
『台湾原住民研究への招待』、風響社、1998年)

ろが大きいのですが、台湾全体での「台湾人」としての意識が高まるなか、「原住民」は台湾人の根源という位置を最も強く主張できるわけです。

それに対して、台湾で同じく少数派エスニック・グループとして客家系の漢族がありますが、客家の運動はなかなか人々の注目を集めないように言われます。それはなぜかというと、客家は運動を始める際に、彼等のルーツをどうしても大陸の広東省のあたりに求めてしまうわけです。客家は必ずしも広東省だけから台湾にわたったのではなく、福建省からの移民もありましたが、大陸にルーツがあることを強調してしまう客家の運動はそこでもどうしても矛盾が出て

しまうようです。この台湾における客家の歴史や現況については、『光華』という日本語と中国語が併記してある月刊誌の客家の特集に、非常にわかりやすく説明されています。

話を「番地」に戻しましょう。まず、清代について今回は時間の関係上、細かいことは割愛しますが、要は、台湾は清朝の版図の一部な訳です。版図の一部なのですが、皇帝の教化の及んでいない土地を「番地」として、そこに住んでいる先住民族を「生番」、それに対してまだ先住民族の文化を保持しているのですが、清朝に帰順した先住民族を「熟番」と呼びました。「熟番」と漢族は次第に互いに通婚したり、雑居状態になっていき、「熟番」は漢化していき

ます。そのように未帰順を「生」、帰順したのを「熟」とする分け方は、実は大陸の少数民族に対しても行われており、清代台湾における先住民民族政策は、大陸との比較のうえで、非常に興味深いところがあるのですけれども、そちらの方はこの後の討論の時間に説明できればと思います。

ここで日本統治期についてですが、レジュメにいくつか参考文献を挙げておきました。今回お配りしたレジュメに載せたのは、比較的手に入りやすいものが主です。台湾では今非常に歴史研究が盛んになっていまして、各地で毎週の如くシンポジウムが開かれており、新しい研究が続々と発表され、私はそれを把握できていないので、見落としている研究も多いと思います。レジュメには特に概説的なものを

載せておきました。但し、レジュメの一番上、通史の項に載せた台湾大学の副教授である王泰升編の研究は販売されていません。王編の研究はオランダ時代から現代までを通覧する非常に良い文献です。「平埔族」以外の先住民族を人類学では一般に九つに分けています。レジュメ(前頁)の地図を参照してください。この九民族は、

日本統治期のはじめには「生蕃」と呼ばれていました。一九三五年には「高砂族」と正式に改称されます。今日の九民族の分布を見ると、それらの民族は清末の一八七五年まで清朝の支配下に入っておりませんでした。一八七五年から清朝の「開山撫番」政策により、地図の台湾東部の先住民族であるアミやプマは清朝の支配下に入ります。その他の民族のほとんどは日本統治期になって実効支配が及びました。日本統治期、アミとプマ以外にも漢族と接し、漢化の進んだパイワンの一部やサイシャットの一部も漢族と同じく普通行政区に編入されます。それ以外は、日本統治期直後に形式的に台湾総督府に帰順したグループであっても、それぞれ固有の言語や文化を保持し、共同体を維持しているグループの居住地域は特別行政区である「蕃地」に編入されます。また、タイヤルやブヌンは台湾総督府に頑強に抵抗します。日本統治直後に形式的に帰順した村落も日本人や漢人を襲ったりしました。台湾先住民族は一部の民族や地域を除いて「首狩り」の習慣があったのです。

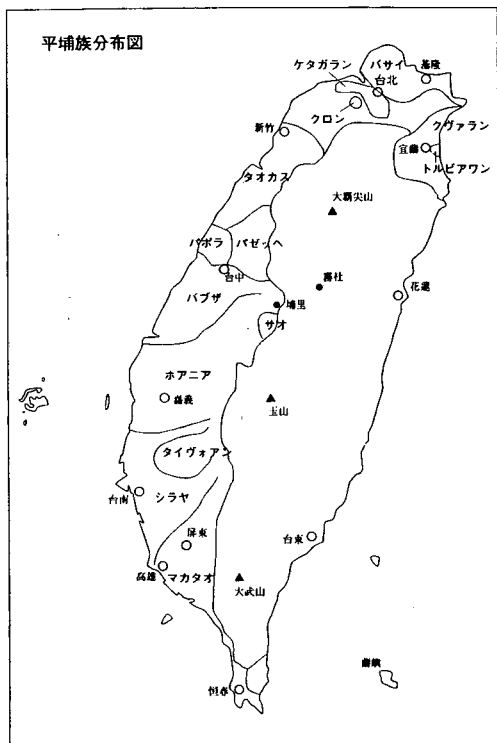
日本は支配を拒む先住民族を軍隊や警察の力で制圧していきます。特に佐久間左馬太台湾総督の時代、一九一〇年から一五年の「五箇年計画理蕃事業」ではほとんどの先住民族が日本に帰順します。但し、一九一五年の段階で先住民族の抵抗が止んだわけではなく、一九三

〇年には高校の日本史の教科書にも出てくる「霧社事件」という事件がありました。これは台湾中部霧社のタイヤルという先住民族の六村落民が蜂起して、日本人一三四人を殺害した事件です。一番奥山に住んでいた先住民族ブヌンの一部の村落などは一九三〇年よりも後によりやく日本に帰順しました。

日本は武力で制圧した「蕃地」にその他の地域と同じような普通行政を施さないわけでは、日本はどのような統治を施したかという、警察による隔離統治を行うのです。平地から「蕃地」に日本人や漢人が入る際には、許可を得なければなりません。逆に「蕃地」の先住民が平地に降りる際にも許可を得なければなりません。

現在の「原住民」籍は、日本統治期には「生蕃」、一九三五年以降は「高砂族」と分類された人々です。「原住民」はさらに「山地原住民」と「平地原住民」に分けられています。「山地原住民」は日本統治期に「蕃地」に居住していた先住民族とその子孫、「平地原住民」は日本統治期に普通行政区に居住していた先住民族とその子孫ですが、「平地原住民」には「平埔族」が含まれません。「平地原住民」というのは、主に台湾東部に居住しているアミやプマのように清朝の「開山撫番」期や日本統治直後に帰順した先住民族です。「開山撫番」前までは、清朝が境界線を引いて支配を放棄していた人々なのです。

清代の「熟蕃」は、日本統治期に「熟蕃」とされ、一九三五年から「平埔族」と公的には呼ばれるようになりました。<sup>(1)</sup>台湾の民主化にともなう台湾人意識の高揚や、郷土意識の高まり、そして台湾原住民族運動のひろがる前は、「平埔族」の人々はほとんど先住民族



(日本順益台湾原住民研究会編  
『台湾原住民研究への招待』, 風響社, 1998年)

のだろうかということは史料二に載せておきました。実は今回、皆様の手許にお配りしました史料は『理蕃の友』という月刊誌から引用したものがほとんどです。この『理蕃の友』というのは、「蕃地」の所轄官庁である台湾総督府警務局理蕃課の月刊誌です。一九三〇年に起きた霧社事件を受け、いわゆる「理蕃」政策、つまり先住民民族統治政策の抜本的な改革の際に警察官それぞれの意思疎通を図るために刊行された雑誌です。その『理蕃の友』から引用したものがほとんどです。

史料二 蕃地に於ける国立公園と理蕃との認識

警務局 高橋生

…(前略)…

であるという意識を失っていました。漢族と身分上の区分はないのです。しかし、最近では今まで漢族としてのアイデンティティをもっていた人々の中から自分は「平埔族」であると名乗り出る者が出てきました。台湾では一般にほとんどその存在が知られていなかった「平埔族」も、次第に注目を受けるようになってきました。清代に「蕃地」、日本統治期に「蕃地」を画した境界線が、今日の「山地原住民」・「平地原住民」、そして「平埔族」という区分をうみだし、それぞれの文化運動や政治運動の違いのもとにもなっているわけです。

### 三 日本統治期の「蕃地」

次に史料から「蕃地」の機能について検討していきましょう。

史料一 蕃地占有ニ関スル律令(一九〇〇年)

蕃人ニアラザル者ハ何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラズ蕃地ヲ占有シ使用シ其他權利ノ目的ト為スコトヲ得ズ。(後略)<sup>(12)</sup>

「蕃地」は一九〇〇年において、早くも国有化されます。この「蕃地」の中でさらに日本の森林事業や軍事的目的に使われる土地、さらに先住民の生活の為に保留された土地が次第に分けられていくことになります。「蕃地」の範囲をどのように区分することができ

## 三、蕃地とは

…(前略)…それでは何を以て境界を定むべきや。明治三十六年四月専売局長の照会に対し、民政長官(今の総務長官)は抑モ蕃地ト称スルハ從來形式上普通行政区域ト判然区分セラレタルモノナタ、又隘勇線ノ内外ヲ以テ之ガ境界ト為セシニモアラス、随テ蕃人出草ノ有無ヲ以テ之ガ分界ヲナスベキ限リニモ無之要スルニ從來蕃界ノ接近地ニ居住セル本島人ノ蕃地ノ呼称シレル慣習ニ依リ其蕃地ト否トヲ区分致候乃至當ト認ム

と通達し、又同時に警察本署長より蕃地関係庁長に対し

云々(前文同様)区分スベキ義ニ有之且ツ蕃地ニシテ已ニ普通行政区域ニ編入シ蕃地ノ称呼ヲ去スルノ時機ニ達セバ編入稟申ヲ俟チ審議スベキ筈ナリ

と通牒せり、是に依つて推考するに原則として慣習に依り蕃地と称し来れる所を謂ふものなるも、已に行政区域に編入され普通行政の施行せられある地域を除外したる地域なりと認められる。殊に大正十年地方官制改正に伴ひ、府令第四十五号を以て制定せられた、州庁の管轄区域によれば、普通行政区域たる街庄と街庄に属せざる蕃地とを区分し郡の管轄を指定してあるから形式の上では区別がついた訳である。が現地を見てさつぱり判明しない、其境界を判然と公表された地図も記録も見当らない、只五万分の一蕃地図に其区画を示したものであるから其れによつて概様を知るに過ぎないが、先づそれを以て其境界なりと云はざるを得ない、故に蕃地に施行せらるゝ特別法令の施

行地域は是れに拠るの外ないと思はれるが、実際問題としては土地の(蕃社の耕地と山脚庄民の所有地と)処理と共に甚だ困難な問題で各所に境界争が頻出し、理蕃上大なる障害来して居るのは遺憾千万である。(後略)

この史料二を詳しく読む時間がありませんが、史料をご覧になればお分かりかと思うのですが、「蕃地」の境界は非常に曖昧です。日本は武力で未帰順の先住民族を制圧していく際に「隘勇線」というものを設けました。この「隘勇線」は清代の「隘」制度を拡張したものです。それは未帰順の先住民族が境界線を越えて、漢族や「熟蕃」居住地に進入するのを監視し防ぐものでした。日本統治期の「隘勇線」では、場所によって鉄条網を張って電流を流したり、さらに火砲を設置したりして、先住民族を囲い込んでいくわけです。この「隘勇線」を前進させる事によって次第に先住民族を屈服させていくという方法が採られます。

史料二では、軍事的な目的でしだいに前進していった「隘勇線」が「蕃地」の境界線かという点、そうではなく、非常に曖昧なもので土地争いの原因になっていると書いてあります。日本の台湾総督府としては、「蕃地」は先住民族の生活の発達、当時の言葉ですと「進化」ですが、「進化」した後にはこの「蕃地」を全て取り払い、普通行政区にすることとは当初から唱えられていました。しかし、結局は終戦まで「蕃地」は存在し続けます。

「蕃地」の面積については、レジメの史料三「蕃地の国土利用と蕃人指導」に載せておきました。それに依ると、昭和一〇年末現在の本島蕃地面積は一六六七〇〇五甲で、全島面積の四五パーセン

トを占めるというものです。これは岩城亀彦という技師の書いた文章から数字のみを一部だけ抜き出したものです。全文は載せておきませんでしたが、そこには「蕃地」の細かい区分がでています<sup>(15)</sup>。

この「蕃地」内の先住民族はどのような法的な地位におかれていたのでしょうか。「蕃地」においては特別行政が施されていますが、私は法制史の専門ではないので、本来ならば法制史のほうから「属人主義」・「属地主義」などという面から議論ができる問題だと思えますけれども、私には厳密なお話ができる能力がありません。

総じていえば「蕃地」に住んでいる先住民族は一般の法令の適用をもちろん受けることになります。ただし、一般の法令をそのまま適用させることができないということです。なぜかといいますと、史料四に書いてある通り、「蕃地における蕃人はおおむね原始的生活を営み、蒙昧でまだ社会生活の意義を解せず、国家観念を欠いて法的生活に適しないものがある」という説明を日本ではしており、「蕃人」が社会生活において「進化」しなければ普通行政は施せないという解釈を採っているわけです<sup>(16)</sup>。

実際にどのような統治を行っていたのかというと、警察にすべての権限が委任されていました。各村落到駐在所や派出所がおかれ、そこに日本人や、漢人、それから先住民族のエリート層、つまり首長の息子や、先住民族の村民の中で優秀な者を警官として勤めさせます。「警手」という巡査のお手伝い程度の者から、さらに乙種巡査、甲種巡査というかたちで任用して、駐在所・派出所によって各村落を支配していくというやり方です。警察の権限については、『理蕃の友』からレジュメに史料六を載せておきました。

## 史料六 理蕃機構の総合的性格と教育

警務局 土屋一郎

：（前略）：

理蕃機構の総合性 俗に理蕃王国といふ、実に理蕃は警察本署蕃務係の時代から、警務系統所管に属するといへば恰も独立官庁の体をなし、府理蕃課より現地駐在所に至る迄一般規範の埒外にあつて、治安、教育、産業、交通、衛生等所有部門を一手に管掌し、被治者の公私生活全野に關涉し生殺与奪の全権を握つてゐる全く独自の存在である。而して此の総合的性格は現地に至るに従つて其の濃度を深めてゐる。

一駐在所三、四名の職員で、幾分の分担の別こそあれ全蕃社の司法、行政の全権を掌握してゐる。更に巡查一人で一蕃社を担当し、国語の指導も、作物の栽培指導も、道路の修繕も、菓の調査も、公安風紀の維持も、何も彼もやつてゐるといふ所も少くない。

即ち理蕃当事者の総てが教師であり、技師であり、医師である。又行政官であると共に司法官でもある。或る時は親ともなり又或る時は僧侶ともならねばならぬ。蕃地教育担任者は教職員とすべきか、警察職員とすべきか其の職業分類に議論さへ生じる所以である。此の混然たる所に理蕃の特色と妙味が存すると思ふ、故に各自分担の殻に閉じ罩つてはならない、生産生活を抜きにした教育が有り得ないと共に教育を考へぬ授産指導も理蕃の本道に外れる。万般の指導保護は彼等の皇民化、国家公民生活向上への根本規範に帰一さるべきである。

近時一般社会機構に於て此の点に著しい転換を來たした事は注目すべきことである。精勤運動が政治と一体化し、經濟機構が個人的資本主義より脱却しつゝあることは、政教一体觀より見て國家發展の企画上当然要請せらるべきことである。

理蕃人は總て教育者である、政教一元の理想郷を理蕃に於て實現せねばならない。(後略)<sup>(17)</sup>：

警察が全ての權力を握り、現地の巡查が、かなり恣意的判断で村落における行政を司っていたようです。今日はちよつと事例を挙げておきませんでしたが、各村落で起こった様々な事件、時には殺人事件や、それから当時多かったのは女性關係、台灣の先住民族は共通して性に対する禁忌が厳しいのですが、日本人警官と先住民族の女性の間で男女關係の問題が起きた際に、どのようにそれを処分するかという問題がありました。特に「姦淫」と呼ばれた出来事、つまり日本人側の強制や不倫です。

「姦淫」などを解決するためには、日本人の警察官の權力だけではどうしようありません。村落の首長層との話し合いが必要です。各村落では駐在所や派出所の日本人警察官のほうが少数派です。日本人と先住民族の間には仲立ちが必要です。その役目を果したのが、先住民族の中から採り立てられた日本語を解する若い先住民巡查です。彼らが仲を取り持ち、お互いの話し合いでいろいろな事件が解決されたようです。

「蕃地」は一面から申しますと確かに日本の法律の「保護」を受けない、そこでは先ほど述べたように非常に進化的な主義的というか、もしくは人種主義的というか、そのような考え方に基づいているの

で、日本の近代における階層制のなかで最低辺に位置付けられたといふことはいえるのですが、実際の局面をみると、日本側は先住民族の慣習を無視することができず、警察が先住民族首長層の意見をうまく反映させることのできる統治方式が「蕃地」だったのです。

ここで史料が前後しますが、史料五に「理蕃政策大綱」の一部を載せておきました。<sup>(18)</sup>これは一九三〇年の霧社事件を受けて一九三一年に「理蕃」政策の抜本的改革が行われた際に制定されたものです。「理蕃の憲法」とも称させられるようになりました。これを読めば当時の「理蕃」政策の目的がお分かりかと思ひます。

警察統治によって同化政策、また、戦時期になって「皇民化」政策が施され、「蕃地」の先住民族は「皇民化」政策の成功例といわれるような状況になります。

この「理蕃の友」を見ても、日本が先住民族の「陋習」とした先住民族の習慣、その廃絶などの申し出は先住民族の側からあったと書かれています。各村落で組織された青年団が中心になってそれを言ひ出すことがありました。<sup>(19)</sup>太平洋戦争期になると、有名な「高砂義勇隊」や海軍特別志願兵、陸軍特別志願兵というかたちで、志願兵がたくさん出てきます。その志願兵達の中には、つまり「血書志願」、自分の指を切りまして血で志願の文書を書いたという者もいました。戦時期の史料ですから、先住民族側の自発的な志願がすべて本当のことだとは、勿論信用してはならないと思ひます。しかし、私も実際に「血書志願」をした人に会い話を聞きました。実際にそのような話を聞きますと、皇民化政策の成功例のように思えてくるわけです。



ただし、史料七や史料八を見れば理解してもらえと思いますが、当時の「蕃地」においては焼畑を行っていたので、焼畑から水田に切り替えようとしていたのですけれども、農民になるしか道が開かれていなかったのです。せいぜい巡査がいいとこどまりです。当時もっともエリートで教養のあった人というのは、医者というのも僅かながらいたのですけれども、巡査がほとんどでした。そのような状況からみると、高砂義勇隊であるとか、特別志願兵であるとか、そのようなものに参加するしか彼等としては「蕃地」を出て外の世界に出る、そして社会的上昇移動をしていく方法がなかったのです。そのことも皇民化政策を分析していくうえで考えなければいけないと思います。

#### 史料七 農業は尊し

新竹州理蕃課 蔭山起

晩近蕃人の智識も漸次進歩発達して来たが、之に伴つて教育所卒業の青年男女中に往々境遇環境を顧慮せずして各種職業を夢想し前途を誤らうとする者が尠くない。思想單純な蕃人青年男女が、偶々平地觀光等によつて自動車運転手の職に憧れたり、又月給生活者が、楽々と金儲けをして、美衣美食に耽つて居るかの如き皮相的觀察を為す者も尠くない。此れは指導教化の立場にある職員言行が誤つて反映し、又は常に農業の尊さを説くに当り、眞の熱情が足らない等が原因となるのではないか。蕃人を育成する最終の目的は善良なる農民である。教育所に於ける成績が良いからと云つて、児童の希望と目前の収入に惚れ込んで敢て農業から離れしめようとすることは禁物である。：

(後略) ②

史料九に「生産拡充を図れ」を載せましたが、農耕民化というの(21)も、じつは当時の戦時下における食糧の増産という目的が裏にはあったようです。

さらに史料一〇の「高砂族と移住」にあるように、日本当局は「集団移住政策」というものを採っていくわけです。史料一〇には「集団移住政策」の目的が箇条書きにあげられています。その集団移住政策は戦後まで続いていくのですが、じつはやはり日本側としては、森林事業ですとか、行いたいわけです。それに対して、先住民の使いたい土地は「高砂族所要地」ということで区画はしましたが、その土地が足りなくなるといふのは数字からはつきりしてくるわけです。その数字についてはレジュメには引用していませんけれども史料三の岩城龜彦の文章に書いてありました。面積的には先住民の土地がなくなるのには目に見えていたわけですが、その際に集団移住をさせて集約的な農業をさせようという方針が打ち出されているわけです。

#### 史料一〇 高砂族と移住

：(前略)：

一、高砂族教化の促進、

二、農耕の集約化による生活資料の増収

三、理蕃経費の節約

四、乱墾・山焼等の損害より免かるゝ国土並森林の保持及其の利用価値の増進

：(中略)：

明治三十六年台中州カト社の移住を最初とし、明治時代に於て一、七五一<sup>人</sup>、大正時代に於て八、五九九<sup>四人</sup>、昭和時代は同六年末迄に五、九〇八<sup>人</sup>、同七年より十二年二月迄に一、〇六二〇<sup>人</sup>、通計二万六千七百七十三人<sup>（中略）</sup>…当局に於ては、将来尚約二万人の適地移住を行ひ、…（後略）…<sup>(22)</sup>

結局「蕃地」は終戦まで続くわけですが、終戦後になりますと、中華民国政府の方では最初は「山地保留地」といういい方をしています。現在では「原住民保留地」といういい方をしていますが、土地の所有権をすぐに認定せずにそれを保留していこうという政策を採る事になります。さらに当時は共産党のゲリラが山地に侵入しないようになどといういい方をしましたが、山地に対する入域制限も行っていました。「山地管制区」という名称で、そのような入域制限や保留地は現在まで続いています。

以上の論をまとめると、「蕃地」を日本が設けたからこそ、警察の支配下におかれながらも、各村落の中でかなり自治を行うことができたということです。逆に、「蕃地」という隔離された空間だからこそ、警察が徹底した皇民化政策を施せたわけです。その使い分けを巧妙にできる地域が「蕃地」であったのです。但し、だからといって日本の統治を肯定できるわけではないということは強調しておきます。

また一方、「高砂族」は、皇民化政策や同化政策の成功例として持ち出されるのですが、例えば「蕃地」の先住民族が戦時には「慰問団」として兵隊にいろいろな先住民族の踊りを見せに行くわけです。日本の統治を受けるまでは「原始的」であった「高砂族」が、

日本の統治によって「進化」し、同化の成功例と呼べるまでになったと強調しながらも、先住民族の踊りを強調して見せたりするわけです。「高砂族」は「高砂義勇隊」のように皇民化の成功例にもされれば、踊りのように「内地」の「日本人」とは異質な先住民族の文化を見せつけることで、「日本人」の優越感を確認する「差別」の象徴にもなり得てくるわけです。その二面性をつくりあげていく際に「蕃地」の果たす役割は非常に大きいのではないのでしょうか。<sup>(23)</sup>

この清代の「番地」や日本統治期の「蕃地」がつくりだした政治・経済、そして社会構造は現在にまで影響しています。現在、「原住民」の保留地をもとに如何にして「自治区」をつくりあげていこうか議論されています。

しかし先住各民族で、「民族集団」としてのまとまりをどれだけ持っているか大いに疑問です。前近代においては「民族」としての意識がなく、まとまりがかなり希薄であったところに、日本が民族分類を施して各民族を作り出していくわけです。「原住民」各民族は、現在、各民族の政治や文化運動の中で次第につくりあげられようとしているわけですが、そのような運動を調べていくと、清代の「番地」や、日本統治期の「蕃地」にまで遡って検討せざるを得ないわけです。時間を超過しましたが、ここで発表を終らせていただきます。どうもありがとうございます。

## 注

(1) 拙稿「伊能嘉矩の台湾原住民族研究」、『学習院史学』、第三七号、一  
九九九年三月。

(2) 拙稿「先住民のアイデンティティ」、『アジア研ワールド・トレンド』

第四卷第一〇号（通巻第三九号）、一九九八年一〇月。

(3) 張士陽「清代台湾における先住民の社会変容」、神奈川大学中国語学科編『中国民衆史への視座―新シノロジー―歴史篇』、東方書店、一九九八年。

(4) 「原住民」という名称の成立については、拙稿「台湾原住民族」、模索として民族像」(PRINCE) [明治学院大学国際平和研究所] 第六号、一九九七年五月)を参照。

(5) 光華画報雑誌社「光華」(中日文版)、第二四卷第九期、一九九九年九月。特集「客家人在台湾四百年史」。

(6) 王泰升編『台湾原住民族的法律地位』、行政院国家科学委员会專題研究計畫、一九九七年。

(7) 「高砂族」という名称の成立過程については、現在の研究者の間でも説明に相違が見られるので、ここに整理しておきたい。「高砂」とは、日本の近世期、日本人が台湾を呼んだ名称である(伊能嘉矩『台湾文化志』上巻、刀江書院、一九二八年初版、一一九〇頁参照)。

その「高砂」を台湾先住民族の総称に用いた経緯について、日本統治期から台湾先住民族に関する人類学的研究を行っていた宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一等の座談会(一九八六年三月二日・三日)で、瀬川孝吉は「大正十二年に、今上陛下(昭和天皇)編者」が摂政宮の時に、台湾においでになった。その時はまだ、日本人は「生蕃」と言っていた時代です。ところが陛下の前で説明するような時、生蕃って言葉はいかにも悪い言葉だと。それで「高砂族」という名称を使おうということに、決まったらしいです。それから言い出した。しかし公文書なんかには、それは表われていない。公文書に表われるのは、施政四十周年の時から。施政四十周年記念というとおかしいけれど、それを機会にいろいろやった一つが、高砂族という名称を使うことだった。だから、その時から公文書なんかにも、高砂族という言葉が表わ

れている。と、聞いておりますがね。」と言っている(宮本延人他著『台湾の民族と文化』、六興出版、一九八七年、二三〇頁)。

一九二三年、摂政宮の台湾行啓の際に「高砂族」という名称がでてきた真相について、警務局長桂長平「高砂族呼称の起源」(台湾総督府警務局撰書課編『理蕃の友』第五年第四号、一九三六年四月)の中に、当時(摂政官行啓時)理蕃課にいた元警部武田駒吉(当時の撫育主任)の談として、「大正十二年摂政宮殿下台湾御成の際御泊所たる総督官邸」で各蕃族の御引見があつた其の時殿下より総督に対し蕃族を生蕃などと呼ぶのは応はしくないとの御言葉があつた。此事は当時蕃族及蕃族参考品の説明の為に官邸に詰めてゐた、宇野理蕃課長が理蕃課に帰つてから話されたもので其の当時蕃族は台湾の原住民族であるから高砂族とも呼んだらばと云ふやうな話も出てゐた。これが動機となつて従来蕃童教育所とか蕃人療養所とかの字を取ることにしたのである」とあり、桂は「当時蕃人を直ちに高砂族と呼称すると定められた訳ではなくて其の後自然に高砂族と呼ぶやうな機運が動いて来たものゝやうである。」と締めくくっている。

「高砂族」という名称が公式に用いられるようになったのは瀬川の言うように、始政四〇年の一九三五年、台湾総督府訓令第三四号として公布された戸口調査規定で、従来の「生蕃」を「高砂族」、「熟蕃」を「平埔族」と呼称改正を行つてからである。同年二月には台湾総督府報告例の改正においても、従来の「生蕃人」なる呼称を「高砂族」と改めることを規定する一方、当局は、公文書および一般文書にも上記の改正呼称を使用するよう通達を出した(戴國輝「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味―台湾少数民族が問いかけるもの―」、戴編『台湾霧社蜂起事件―研究と資料』、社会思想社、一九八一年所収、一四・一五頁。台湾総督府訓令第三四号の原文は台湾総督府『府報』、第二四〇六号、昭和一〇年六月四日を参照)。

(8) 日本統治期に当局の指導により廃絶した台湾先住民族の一部が保持

していた「首狩り」の慣習の人類学的分析については、金子えりか「歴史的な慣習としての首狩、そして、過去を克服する必要」(『台湾原住民研究』第四号、一九九九年)を参照。また、同論文の中で、金子は「慣習」としての首狩りの分析の後に、「植民地当局が首狩を抑止するために措置を講じなければならなかったように、台湾原住民の方には、支配者の圧倒的な軍事力と経済力に抗して、彼らの自律性を守る必要があつた。彼らに残された手段は、ゲリラ戦術と首狩という伝統的な手法であつた。」とつけ加えている。台湾先住民の首狩りについては、「慣習」という側面の他にも、先住民内部・漢族・日本人相互の対立関係や、清朝・日本の台湾総督府の支配に対する抵抗など歴史的な側面からも考察していく必要がある。

(9) 最後まで日本への帰順を拒んでいたブヌンのタマホ社(当時、高雄州旗山郡)が、日本当局に帰順したのは一九三三年である。

(10) 現在の「原住民」の身分については、「原住民身分認定標準」(中華民國八三年一〇月二四日内政部台(八三)内民字第八三八四七三号令修正發布)で定められている。その全文は、『台湾省政府公報』(冬字第四一期、台湾省政府秘書処発行、一九九四年一月二日)に掲載されている。

(11) 註七参照。

(12) 台湾総督府警察本署編『理蕃誌稿』第一巻第一編、一九一八年初版、一五三頁。

(13) 前掲台湾総督府警察局理蕃課編『理蕃の友』(一九三一一一九四三)(再版『理蕃の友』全三巻・別冊、緑蔭書房、一九九三年)。「理蕃の友」は日本植民地下の台湾で、特別行政区「蕃地」の所轄官庁である台湾総督府警察局理蕃課が、理蕃課警察官むけに発行した月刊誌である。一九三二年一月の創刊から一九四三年二月の廃刊まで、二年間合計一四四号が刊行された。これまで、日本や台湾の限られた研究機関や図書館でしか見ることができなかったが、緑蔭書房から一九九

三年に三冊にまとめられ復刻されて利用しやすくなった(ただし第九七号・九八号・一〇七号・一二三号・一二八号・一三二一―一四三三号)。また、別冊には近藤正己による「理蕃の友」解題―「理蕃政策大綱」から皇民化政策へ」と「総目次」、「著者名索引」が収められている。近藤解題では、霧社事件以後の警察局理蕃課の「理蕃」体制の再編という事態の中での「理蕃の友」の発刊理由、再編時に総督から地方長官に通達された「理蕃政策」(先住民民族統治政策)の基本方針「理蕃政策大綱」の考察と全文の掲載、「理蕃の友」から読み取る「皇民化政策」などについて検討されている。

(14) 同上『理蕃の友』第七年三月号、一九三八年三月。

(15) 同上『理蕃の友』第五年三月号、一九三六年三月。一甲は、〇・九六ヘクトール。本文史料二に「蕃地」と普通行政区の境界は判然としないと書かれながら、史料三ではその面積がはつきり書かれており矛盾している。「蕃地」の画定については筆者はなお研究を要し断定的なことはいえないが、史料二と史料三の矛盾から次のようなことが指摘できるのでなかろうか。つまり、「理蕃」当局者や「蕃地」居住の先住民、そして境界地帯の漢人は、総督府側からはっきりとした境界線を示されておらず、混乱しているということである。

(16) レジュメに掲載した史料四は長文のため、本文ではなく註に載せる。  
蕃人の法律上における地位

台湾の蕃人(高砂族あるいは山地族とも称する)も内地人及び漢民族たる本島人とともに日本国民であることには議論の余地がないのであるが、ただ彼ら蕃人は山地深くに居住して外部との接触が少ないため、文化の程度はきわめて低く、これがため特別行政の下に置かれ、一般住民に比して手厚い保護と特別の取締をうける状態にあるのである。従つて蕃人に対しては普通行政区域において行なわれる諸法令もほとんど適用されないのが現実であつて、このような事実は法理上いかに説明されるべきか、蕃人の居

住するいわゆる特別行政区域に対し、また蕃人に対し一般的に法の施行、適用を除外すべき旨の明文が設けられていないだけに、関心も自から生ずるわけなのであるが、これについて、台湾総督府の調書中に表示された見解を次に紹介することにする。

一 本島における法令の施行区域 本島における一般法令については特に施行区域を定めたものを除くの外本島の全域に及ぶものである。すなわち法令はその施行区域の定めを設けない場合にあることはその法令施行についての権限を有する官庁の管轄する区域の全部に施行あるべきものであるからである。故に本島においては市街区域を置いた行政区域（普通行政区域と称する）であるとその他の行政区域（以下蕃地と称する）であるとを問わず一般法令は一律に施行されるべきものである。

二 蕃人の法律上の地位 法令の施行区域については前述のとおりであるが、その施行区域内に在るすべての人に対してその適用があるか否かについては更に一応の考察を試みる必要がある。すなわち本島における蕃人について法令の適用があるか否かは法令が蕃地にも施行される故をもつて直ちにこれを考えることができる。

蕃人とは何ぞや、領台以前から本島に土着する漢民族たる本島人以外の者を指称するものである。蕃人なる語は、非文化的生活形式を有するものであるとの意義であつて、蕃人の分布を見ると普通行政区域外のいわゆる蕃地に居住するものが大部分を占めるが、普通行政区域内に居住するものもまた少なくない。そしてこれら蕃人中には相当程度の教養を有し、文化的社会生活を理解するものもあつて、一般人民と何ら異ならないものもある。これらの者については法制上一般人民と区別すべき理由がないが、蕃地における蕃人はおおむね原始的生活を営み、曖昧でまだ社会生活の意義を解せず、国家觀念を欠いて法的生活に適しないものがあ

る。しかるに現今における一般法令はおおむね法の適用について蕃人を除外するの規定を設けないので、蕃地における蕃人もまた、法理上は一般人と区別なく同様な法的生活をし、諸般の法的制約を受けるものと解しなければならぬ。しかればこのような場合に、右の理由で直ちに法の目的とするところがそのままあらゆる場合に実現されるべきかの問題を生ずる。蕃人は既述のように曖昧で社会の何たるか国家の何たるかを解しない者が多く、その文化はきわめて低級なものであるから、あるいは行為能力を欠く場合もありあるいは責任能力を欠いている場合もある。従つて具体的事案においてはその能力の有無が問題となり、この点に関する個別的の審理を要するのである。換言すれば刑罰法令において責任能力の有無、従つて具体的科刑の適否又は民事法令における行為能力の有無、従つて法律行為の有効無効等に関する問題は個々別々に具体的事件について決定を必要とするものと云わなければならぬ。現行法令の法理上の解釈としては以上のとおりである。

しかるにこれに対し、法は社会のために存し、国家の法令はその規律の対象とした一定の文化を有する社会に少なくともこのような社会と文化の程度に著しい差異のない社会においてのみ妥当性を有するのであるから、法は対象とした社会生活と著しい差異のある社会を規律するに適しないものである。法令は一般にその前提として一定の文化を有する社会の生活を予想し、その予想と異なる社会においては適用しないとする法意である。しかるに現行の法令ははるかに程度の高い文化人の生活に関わる規範であつて、蕃人のごとき文化に著しい差異のある原始的生活を営むもののときは法令適用の客体となり得ないので、蕃人に關し、特に定めたものを除くのほか適用のないことを原則とする。ただわずかに客観的にこのような能力があるものと認められる場合についてのみ適用あるべきものであるとの見解も想像されないでもない。

いが、このような見解は事実上蕃人に一般法令を適用しない実状に合致せよとする政策的解釈あるいは目的的解釈にすぎない。法令において特に制限を設けないのにこのような見解を下すのは法理論としては不可欠である。すなわち蕃人に対する法の適用を予想しなかつたものとするのは一種の独断にすぎない。若しまたこれを除外するの意思であるとするならば法文にその旨を明らかにしたのである。しかのみならず政策的説明は、その法の適用範囲においてきわめて不明瞭であるからである。

故に法はこのような場合にも適用あるものであつて、ただ法の目的である効果を実現するか実現しないかは具体的に定めるの趣旨と見るべきものである。

このような法理の要求するところと、現実の必要を統一し、これに矛盾のない解釈を与えようとするためには「蕃人に関しては一般法令の適用をなさず別に定むる特別法令に依る」旨の法規を制定する必要があるであらう。このようにして初めて実際の取扱に對する法律上の根拠を与え、行政上の実際を合法的にすることが出来るものと信ずる。以上

（外務省条約局法規課編『日本統治下五十年の台灣』『外地法制誌』第三部の三、一九六四年、五一五五頁。）

（17）前掲『理蕃の友』第九年九月号、一九四〇年九月。

（18）レジュメに載せた史料五は長文のため註に掲載する。史料五は特に重要と思われる第一項は全文を載せたが、第二項から第八項までは項目の文章だけ載せて説明は略した。全文については、前掲註一三近藤正己『理蕃の友』別冊解題を参照。

史料五 理蕃政策大綱

（一九三二年二月）八日太田政弘台灣総督が地方長官に通達

第一項 理蕃は蕃人を教化し、其の生活の安定を図り、一視同仁の聖徳に浴せしむるを以て目的とす。

理蕃政策は時により多少の変遷を見たりしと雖も、其の終極目的が蕃人をして一視同仁の聖旨を奉体し、遍く皇化に浴せしむるに在ることは、従来より一貫して渝らざる根本精神なり。事に理蕃の局に當る者は須らく斯の精神を体して綏撫化育宜しきに随ふべく、一般の人々も亦当局者と力を勸せんを一にし、苟も憎惡蔑視の念を以て之に臨むか如きことなく指導誘掖に努めざるべからず。台灣に於ける蕃族の現在総戸数二萬三千九百二十五、人口十四萬五千五百五十三、内普通行政区域内居住者は戸数七千七百二十七、人口五萬四千三百九十九にして（昭和五年）、此等蕃族は大約七種族に分れ（タイヤル、ブヌン、ツォウ、サイセツ、パイワン、アミ、ヤミ）各其の習俗を異にし、生活狀態文化程度又一様ならず、殊に「アミ」族は普通行政区域内に居住し性質柔順にして農作及労働に従事し教育の程度も他種族に比して著しく進歩し、其の生活狀態は殆んど本島人と比肩すべき狀態に在り。又「アミ」族以外の種族に在りても、従来山脚の平地に移住し水田耕作又は山間に在りても農耕適地の存する在りて産業指導宜しきを得たるものは、夙に殺伐鬭争の風を脱し進化的程度著しきものあり。然れども交通不便なる奥部地帯に住居せる多数の蕃族は今尚現代の文明と没交渉なる原始的生活を営みつつあり。之を教化し之を撫育し以て文明の恵に浴せしめんことは容易の業に非ず。理蕃が台灣統治上の難事業たる所以実に茲に存す。然れども事に理蕃の局に當る者は須らく堅忍不拔上述の根本精神に則り、彼等の教化に努め、其の生活の安定を図り以て忠良なる陛下の赤子たらしめんことを期すべきなり。

第二項 理蕃は蕃人に対する正確な理解と蕃人の實際生活を基礎として、其の方策を樹立すべし。…（中略）…

第三項 蕃人に対しては、信を以て懇切に、之を導くべし。…（中略）…

第四項 蕃人の教化は、彼等の弊習を矯正し善良なる習慣を養ひ国民思想の涵養に意を致し実科教養に重きを置き、且つ日常生活に即したる簡單なる知識を授くるを以て主眼とすべし。…(中略)

第五項 蕃人の經濟生活の現状は、農耕を営むを主とすとも雖も、概ね、輪耕作にして、其の方法、極めて幼稚なり。将来、一層集約的定地耕作を奨励し、或は集団移住を行ひ、彼等の生活狀態の改善を計ると共に、經濟的自主獨立を営ましむるに努むべし。又蕃人に関する土地問題は、最も慎重なる考慮を払ひ、其の生活條件を圧迫するが如きことを期すべし。…(中略)：

第六項 理蕃關係者、殊に現地に於ける警察官には、沈着重厚なる精神的人物を用ひ、努めて之を優遇し、漫りに其の任地を變更せしむるが如きことなく、人物中心主義を以て、理蕃の効果を永遠に確保するに努むべし。…(中略)：

第七項 蕃地に於ける道路を修築して、交通の利便を図り、撫育教化の普及徹底を期するに努むべし。…(中略)：

第八項 医薬救療の道を講じ、蕃人生活の苦患を軽減すると共に、依て以て理蕃の実を挙ぐるの一助たらしむべし。…(後略)：

(19) 日本当局が組織づくりを推進した「青年団」と先住民族村落の既存の実権者との相克については、先住民族のひとつアミの例として、宋秀環「日本統治下の青年団政策と台灣原住民アミ族を中心として」(中生勝美編『植民地人類学の展望』、風響社、二〇〇〇年)が数少ない研究のひとつとして大いに参考になろう。

(20) 前掲『理蕃の友』第三年五月号、一九三四年五月。レジュメに載せた史料ハは長文のため、本文ではなく註に載せる。

史料ハ 高砂族の職業指導

環境が人類の個人生活及社会生活を支配することは、自然の理である。

海辺には漁夫が多く、山には仙や樵夫や炭焼が多い。高砂族も亦山の環境に成育して、獸皮の帽に蕃衣、蕃刀、弓矢、鉄鉋を携へて千仞の断崖、千古の森を縦横に馳駆して猪や羌羊や熊等の獵物に一家団樂の原始的狩獵中心の生活であつた。

然し時代は移つた。改隸茲に四十幾年、当時の瘴癘蜜雨の地は蓬萊の島となつて山川草木悉く皇化に浴し名実共に天下の楽土と謳はるゝに至つた。化外の民高砂族も今は立派な日本臣民として立ち上り農業賤視の風は払拭されて、狩獵は殆んど顧みる暇もない農耕中心生活に移つて来た。更に文化の潮は彼等の環境にも押寄せて、道路は開鑿されて、交通は至便となり、教化は進んで家に不学の子なく皇民意識に燃える若き血潮は躍動し諸事革新の潮流は今や激しい勢で流れて居る。この状態を反映して狩獵中心の改隸前の生活と今の職業分野がいかに變つたか？之を昭和十四年度の教育所出身者状況について一瞥すると、官公吏雇傭員五六七、農業一八、六二〇、医療四、土木建築六、採炭業一、林業八、教育者一一、運輸一、商業一日傭人一四四等で総数二一、三一九人に對し、農業は八割七分で残り一割三分は農業以外の職業に従事して居る。これは教育所出身者のみの状況ではあるが、農耕中心時代より更に、他の職業に推移して行きつゝある状態が窺知されると思ふ。

斯る現象が高砂族進化の過程から見て果して可なるや否なるや一概に断言し得ざるも従来高砂族の職業は彼等の環境、性能、慣習等の關係より原則として大地に足を踏みつけた山地農業者として指導されて来た。然るに近年平地方面労働力不足に關連して山地高砂族の労働者化の声を耳にするのみならず、現に山地に於ける事業の勃興隆昌に連れて山地高砂族の勞力提供を希求されつゝあり、又高砂族自体に於ても農業以外の職業に転出方を希望する者も少くない様である、此の秋に當り漫然一般の希求を全面的に

受入れ又は高砂族自体の自由意欲を放任せんか蕃社の健全なる発展を阻害し高砂族の将来に悔を残すの虞なしとせない。茲に督府當局は此の高砂族職業指導問題に就き深甚の検討を加へられ左記の様な方針を決定して通牒せられたのである、尤も右方針の決定に際して敢て高砂族自体又は理蕃の立場からのみ断定せられたものでなく又高砂族の向上進展を全然封せんとするものでもなく、時局下高度国防国家建設の線にも副ふべく大局的見地からも検討審議された事は云ふまでもないのであるから理蕃の局に当る者も局外者もよく通牒の内容を頑味せられて善処せられんことを要望する次第である。

一、高砂族は主として高砂族所要地内に定住せしめ淳朴なる自作農民として又は堅実なる山地開発事業の協力者(餘剩勞力供給又は小作等)として指導教化する方針なり。

二、高砂族の人口過剩其の他特別の事由に因り前号に拠り難き時は所要地外に定住地を求めて集团的に農業に従事せしむるの方策例へば製糖会社の小作の如しを採ること。

三、高砂族所要地内及前号の場合に於て其の社会共同生活上必要なときは農業以外の職業と雖個人的に之を指導養成すること。

四、所要地外に於ける農業以外の各種職業は個人的なると集团的なるとを問はず現在理蕃の進展過程に鑑み、仮令収入其の他各種の生活条件適合し将来独立自営の見込あるものと雖今日之を奨励するは蕃地に於ける指導的人物を失ふ結果を生じ延いては蕃社の進歩を阻害する虞あるを以て、将来高砂族の一般的進化度に応じ第二次的に考究すべき事業と認めらるゝも個人的に特に特種職業を希望する者に対しては本人の人的要素、職業の種類、定住地の環境、蕃社の発展に及ぼす影響等各方面より詳細に検討を加へ、支障なきに於ては之を許容して指導助成する

こと。(坂田生)

(21) 〔前掲「理蕃の友」第一〇年七月号、一九四一年七月。〕史料九も長文のため、本文ではなく註に載せる。

史料九 生産拡充を図れ

聖戰茲に第四年、東亜新秩序の建設は着々と進み、興亜の偉業完成も將に近きにあらんとする秋、我が高砂族に於ても微力ながら国防献金に、愛国貯金に、將又軍需物資の生産に大奮の活躍を続けつゝあることは洵に同慶に堪へない。此秋に當つて我等理蕃同人は益々時局の重大性に鑑み、我國現時の新事態に即応する様高砂族の指導に一段の考慮を払ふ必要を痛感せられる。

由来高砂族経済生活の指導目標は、努めて集約的定地耕を奨励し、又は集団移住を行ひ、以て其の生活を改善し、自主的農民たらしめるに在ることは理蕃大綱を繙くまでもない。而して此の定地耕と言ひ、集団移住と称するも、その實際問題としては、多くは水田適地を求め集まることは亦自然の勢である。

「米喰ふ蕃人は反抗しない」とは古くから理蕃通の間に言ひ馴らされた言葉であり一面の真理でもある。従来輪耕作をのみ事とし粟、黍、稗、甘藷等を常食として居た彼等が、漸く米の美味を知るに至らば当然其の味覚を慕つて之を生産すべき水田又は其の定耕地に執着を持ち、其の土地を離れ得ざるに至るが故に、敢て反抗を企て、山中に遁入するの愚を述べずと言ふに在る。実に集団移住は公安維持の見地よりするも、將又教化促進の上よりするも頗る重大なる意義を有つものといふべきである。

乍併只米作奨励にのみ心を奪はれて在米食の生産を閑却するが如き事ありては、尠くも現在の我が国情に照して適当な指導振りとはいふ得ないのではあるまいか。今や世は挙げて生産拡充、消費節約の時代である。精白米を廃して七分搗米を全国民に強要する時代である、理蕃人と雖戰時食糧対策に無関心であつてはなる



まい、蕨麻やデリス等の時局作物の奨励を以て足れりとするものでもない、一般文化人に対して粟、黍、甘藷などを常食とせしむることが困難であるとするならば、現在尚ほ之を混食又は常食して何等の不足を感じぬ彼等に対しては成るべく之に拠らしめ、以て其の得たる剩餘米を市場に出して長期戦に備へしむることは洵に時宜に適した方法であらう。…(後略)…(齋藤)

(同上『理蕃の友』第九年三月号、一九四〇年三月。)

(22) 同上『理蕃の友』第七年五月号、一九三八年五月。

(23) 本稿論旨のヒントは、石田雄「同化」政策と創られた観念としての

「日本」(上)(下)、『思想』(上)(八九二号、一九九八年一〇月)、

(下)(八九三号、一九九八年一月)から得たものが大きい。特にア

イヌ民族と「高砂族」の比較ができる。